



玄翁和尚(ワキ)が登場し、奥州から都へ来る途中で、和向に殺生石のあることを語ります。



巨岩の上を飛ぶ鳥が悉く落ちるのを目撃します。

里女前シテが登場し、和向にその岩、殺生石は、近づくもの命を奪うので、害らないうちに注意します。



近づいては いけません

前シテ：里女



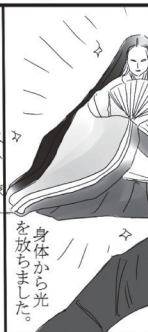
女は、和向に殺生石の謂れを語ります。



昔、玉藻の前という出自はよくわからないものの、美しく教養深い上臈がして鳥羽院の寵愛を受けていました。



ある時、院が管絃の宴を開いた晩、殿上の灯火が大風で消えてしまいましたが、その時、玉藻の前は一目に心を奪われ、



身体から光を放ちました。



その日から、院は、除陽師・安倍泰成は、玉藻の前が原因であるという説を、調伏の祭りによつて



妖狐の正体を暴きます。



正体を暴かれた玉藻の前はこの地に逃げきます。女は自分が玉藻の前だと告げて、石の中へ消えます。

夜になり、玄翁和尚は石に向かって仏事を行います。



すると、石が割れ、中から妖狐の魂(後シテ)が現れます。



妖狐は、天竺では斑足太子の家の神中国では、幽王の後妻似、日本では鳥羽院の玉藻の前となり、



王法を破けようとして、泰成の調伏によつて正体を暴かれ、この那須野に逃げ込みます。



玄翁和尚の法力によつて、改心すること約束し、成仏するのでした。



その後、勅使が立ち、三浦介と上総介に、妖狐退治の命が下ります。両介は、狐が大に似ているため、百日の間、犬によつて訓練し、妖狐退治に備えました。



そして、人によつて、ついに妖狐は命を落としたのでした。



しかし、妖狐の執心は、死後も残り、殺生石となつて、近づくもの命を、長年奪ひ続けてきたのです。



玄翁和尚の法力によつて、改心すること約束し、成仏するのでした。



玄翁和尚の法力によつて、改心すること約束し、成仏するのでした。